野上彌生子の〈育児もの〉
――〈新中間層〉と〈大正期教養主義〉のはざまで

佐々木　亜紀子

一　〈育児もの〉に至るまで

野上彌生子は現在の大分県臼杵市に明治十八年（一八八五）年、祖父の代から酒造業を始めた新興商店小手川家の長女として生まれた。高等小学校時代から、久保会蔵のもとへ「本読み」に通い、十五歳で叔父を頼って上京し、明治女学校へ入学した。当時の時代と地域性から考えれば、女性として相当に恵まれた教育を受けたといえる。彌生子が高等小学校を卒業した明治三十三（一九〇〇）年、臼杵には高等小学校以上の教育を女子授ける学校がなかったのである。彌生子は臼杵で女学校に入学した最初の女性であったのだ。

明治三十九（一九〇六）年、明治女学校を卒業後、彌生子は同郷で夏目漱石門下の野上豊一郎と結婚した。豊一郎も臼杵で最初の第一高等学校進学者だった。豊一郎は高等学校と大学で、ロンドン留学を終えたばかりの夏目金之助の教え子となり、ごく早い時期から夏目家に出入し、終生「漱石山脈」に連なった。

よく知られるように、彌生子はこの夫を介して夏目漱石に小説指導を乞い、結婚の翌年文壇デビューを果たした。「写生文」を標榜する『ホトトギス』に漱石の推薦のことばをつけて発表されるという破格の扱いを受けた。「漱石山脈」の裾野

に最初の一歩を得られたことが、彌生子の小説家としての人生を決定づけたことに異論の余地はないだろう。

加えて、商才によって成功した小手川家の出身でありつつも、豊一郎が学問と学歴によって生活を支える夫であったことに留意したい。はからずものちに都市部に増加する〈新中間層〉と同質の家族形態であったのだ。一九一〇年、一九一三年、一九一八年に三人の男児をもうけてからは、妻・母親であることを印象づけた読み物を、この層の女性に提供した。それらの作品をここでは〈育児もの〉と名づけ、その時代的背景や意味を検討する。

二　〈育児もの〉の特徴

野上彌生子の〈育児もの〉としてここで対象とするのは、一九一〇（明治四十三）年「母上様」から一九一九年「母親の通信」までで、育児に関わる小説、随筆、詩、戯曲である。[1]

〈育児もの〉の第一の特徴は、西洋的感性を前景化させ、出産や育児の聖化につなげていることである。

たとえば「新しき命」では、二人目の出産を迎える曾代子に陣痛が始まる場面が冒頭に置かれる。「小さい息子」と夫に見送られながら病院へ向かう人力車の中で、曾代子は「これからの二三年の間、また当然負はなければならない育児の重い責任、気苦労な雑務、それから生じる精神的、肉体的の疲労、束縛、犠牲」を思い、妊婦として「異形に醜くなつて行く身体が浅ましく、恥ぢられ」ながらも、自らを鼓舞しながら次のように「決心」する。

私は今大事なことをしようとしていゐるのだ。人間として、女性として、この地球上に生きてゐる以上、種族として人間の生存、保存の方法が今在る組織以上に改善されない間は、これより意義の深い仕事はない筈である。

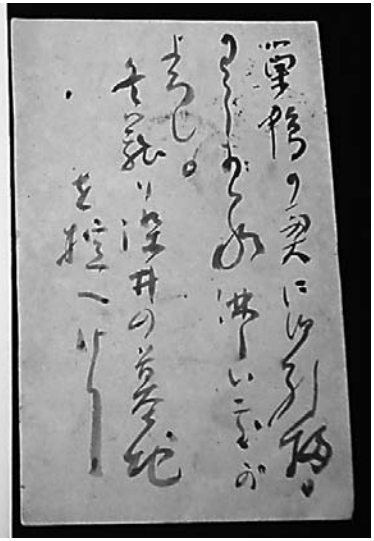
そしていよいよ「苦悶と悩乱、号泣と叫喚の連続の後に、体内に封じられてゐた、新しい生命はやつと外に絞り出され」たあと、曾代子は「赤ん坊は皆んな神様の子供」という感慨を夫に語る。初産での「辛らい経験」から「生みの苦しみに対して強い嫌悪と恐怖」を抱いていた曾代子が、二度目の出産を通りぬけて成長を遂げたことを誇り高く印象づける。そして「苦闘」を忘れ、生まれた子どもを「小さい新人」と名づけるのは、出産の聖化といえる。

〈育児もの〉のごく初期に位置する「母上様」にも、「新たに母となつたお槇にとつては、子供と云ふものは如何にも珍しい不思議な神様であつた」とある。男性作家には体験的に書き得ない出産という素材を選び、「意義の深い仕事」と定義づけ、子どもを「神様」「新人」とよぶ。生まれた子どもの聖化は、母親業の聖化につながってゆく。だが注意したいのは、これは地蔵菩薩信仰のような、土着のあるいは前近代的な感性ではない。あくまで「「春の目ざめ」の中のヴェンドラ」[2]（「新しき命」）を想起する西洋文化の感性として、育児を聖化しているのである。この感性は一九一八（大正七）年一月に発表された「霊魂の赤ん坊」まで通底している。

彌生子の〈育児もの〉にみられる第二の特徴は、「郊外」という場所があげられる。これはもちろん彌生子自身が染井に近い「下巣鴨町上駒込三百八十八番地」に住んでいたことに起因する。彌生子たちがその地を選んだ理由は不明だが、作品にはその場所がいかにも育児に適した場所として描かれている。たとえば「楽み多き郊外生活「染井附近」」には次のようにある。

郊外に住みなれてから嬉しい事がいろ〳〵あります。空気の清らかな事、樹木の多い事、植木屋の多い事など。

さる人から、先達ッて或医学会で東京附近の空気を検査して見たところ染井橋を中心としての附近の土地の空気――即ち此郊外附近の空気が、一番黴菌の少ない善良な空気であつた、と云ふ話を聞きました。



野上豊一郎宛夏目漱石書簡
（明治39年11月［17日］付）
個人蔵（大分県立先哲史料館寄託）
佐々木 撮影

つまり「黴菌」が少ないという「医学」の見地という裏付けによって「郊外」のよさが強調されているのである。そしてこれは次節に述べる三田谷啓がのちに推奨した育児環境を先取りする生活でもある。

野上夫妻が巣鴨に転居したとき、師の夏目漱石は豊一郎宛に転居通知への返礼と推定されるはがき[3]を送っている。そこには「巣鴨の奥に御引移りのよし拝承淋しい処がよろし。」とあり、「冬籠り染井の墓地を控へけり」と句を記している。

彌生子は師のことばを実践するかのように、「墓地を通る」「墓地を通る（第二）」で染井の墓地の散歩を小説化する。あるいは「汚れた市内の空気」、「物さわがしい群集、刺戟の強い熱鬧」といった「都市の圧迫」を嫌悪することばを連ね、そこから逃れて「郊外の小さい停車場に下車」すると、「寂しみの籠つたもの静かな調子」に「快さとすが〳〵しさ」（「楽み多き郊外生活　「染井附近」」）を感ずると記す。『ホトトギス』という発表誌を考えれば、吟行という意味合いや、限定的な生活圏を「写生文」にするという方法を意図したともいえよう。だがもちろんこの感覚は、漱石の俳句に漂う伝統的

な隠者の美意識からは遠い。「染井より（一）[4]」では、「例の社の重（ママ）な同人」「Nさん」、すなわち伊藤野枝と「染井の森」で過ごしたときを次のように語っている。

Nさんも丁度時間の頃だと云つて赤ん坊を下して一緒に乳を飲ませました。（中略）イヴもこんな森の、こんな木の下でお乳をやつたかも知れないわねなんて二人で笑ひました。（中略）あのワルデン湖畔の森林の中に、自分の手で小さい家を建てゝ、たゞ一人静かな、簡素な生活をしたトロオの事が思ひ出されました。

スノビズムに塗り込められた一節であるが、「イヴ」に同化する女性性の神話化とともに、「トロオ」すなわちヘンリー・ソローの「森の生活[5]」にも言及しているところに注目したい。彌生子の〈育児もの〉は、あくまで欧米文化を吸収した西洋人に見立てた「郊外生活」として強調されているのである。

また、彌生子の〈育児もの〉には、使用人がよく言及されることも特徴としてあげられる。たとえば『婦人画報』掲載の「婦代の讃美」の「婦代」は「下婢」であるが、「何処のものとも知れない人に、私の大事なお坊ちやまが委されませうか」と、雇い主の価値観を内面化する従順な使用人である。

このような「下婢」の「待遇法」を披瀝したのが、「御返事」である。この作品は「婦代の讃美」を読んだ「H子様」からの質問に応答する書簡体で次号に掲載されている。そこには、「自分達とは教育趣味、好尚を異にした、且つ大概低級な一人の見ず知らずの他人を我家に同居させる訳になる」から雇いたくはないけれど、「体力と技倆と時間」の節約のために「便利な家事労働として下婢を使用」するというやむを得ぬ事情が語られる。そして「下婢」「使用」の成功者として、「下婢」には「自分の家の空気を呑み込ませよ」と読者を導いていく。渡邊澄子はこれを「「エリット」造りの開始」の一端としての「子守の徹底教育」であると的確に指摘する[6]。差別的な階級意識を露呈させ、読者に文化的・階級的基盤を共有す

る語りかけで親近感を抱かせるのに、書簡体は有効な仕掛け[7]になっている。

また特に注目したいのは、「自分の家の空気を呑み込ませよ」というときの「空気」とは、「家風」ではなく、「良人と私とで初めて形作つた新らたな家」の「精神的な」「その家を包んでゐる情調」であると言い換えている点である。これはのちに述べる〈新中間層〉の発想に近い。

ほかにも『婦人画報』には他の発表媒体に比べて、育児の喜び（「毀れた玩具の馬」）や育児を通して母親が成長すること（「小動物」）を確認する内容が多い。育児の成功者の口吻が見え隠れして、育児に肯定感を抱きたい読者、すなわち育児に自己実現を託す〈新中間層〉の母親にとって、なじみやすい内容となっている。

三　〈育児もの〉の評価

野上彌生子の〈育児もの〉は、現代の目から見れば「世間知らずな奥さま作家の生活記録の域を出ない」といえばそのとおりだ。だがここでは、「凡作でも不出来でも、書けば活字になった[8]」時代の評価を手掛かりに、「生活記録」を受け入れる背景を検討しよう。

〈育児もの〉について、野上豊一郎の二年先輩にあたる森田草平が次のように述べている。

女ながらも明哲身を保つの術を心得てゐられるのである。尤も、私はこれを悪く云ふつもりで云つた（中略）。昨日借りて来て読んだものの中では、私には矢張り『母親の通信』が一番面白かつた。（中略）その外夫人の所謂お襁褓臭い作品は皆それ〴〵の意味に於て面白かつた。[9]

森田は他に『海神丸』や「キリストと祖父と母」[10]などにもふれているが、「芸」「ブツクキツシユ」「多能」などいずれも逆説的で皮肉めいた批評である。それゆえ、この文脈のなかでは「矢張り『母親の通信』が一番面白かつた」というのもほめ言葉ではなく棘のある表現だ。『海神丸』のような男社会を描くより育児「通信」でよいという含みがある。そのうえでこれらを「お襁褓臭い作品」と故意に矮小化して語るのは、育児というものを文学の素材として扱うことへの違和感がまずあったからだろう。だがそれだけではなく、草平には育児そのものの価値も育児への関心の高さも、理解しがたい現象だったに違いない。森田論に対して、助川徳是は次のように述べている。

> 少なくとも彌生子にとって、「オムツ小説」ではない。子は母の親馬鹿な情愛の対象ではなく、母の神聖な崇拝の対象であり、従ってそれとの交渉はいわば祭祀に似ている。（中略）野上彌生子にとって、家庭こそは彼女の神聖な「学園」であり、そのオシメ小説こそ、彼女の「女学」の理想の彼女なりの体現であり、彼女の「この家庭を見よ」の書であったのである。[11]

「祭祀」という比喩は子供を神聖視するお槇（「母上様」）や曾代子（「新しき命」）の心性をうまく言い当てている。また「知識ある賢明な女性がよい女性であり、よい女性がつまりはよき母であり、よき妻であるという」「女学の理想」を〈育児もの〉にみるのも妥当であろう。だがそれに加えて、〈育児もの〉を受け入れる読者層があったという時代の背景も見逃せない。家庭における女性のありかたに変化があったのだ。それは草平の視野の外にあったかもしれない。

小山静子は『女学雑誌』の家政記事などから、女性が「子どもの教育に積極的」に取り組み、家長の管理権下ではない「家庭内における自律性」をもつことが推奨されていることを指摘[12]している。それはいわゆる「近代家族」とよばれる家庭内で、男女が役割分担をし、育児は女性が担当するものとして固定化されていくことと軌を一にしている。育児を担う

ための動機づけに必要なレトリックとして、子どもを神聖視し、ひいては母親であることを神聖視するのである。彌生子が描いたように、出産は「意義の深い仕事」（「新しき命」）であり、「子供と云ふものは如何にも珍しい不思議な神様であつた」（「母上様」）と、育児は聖化される誇り高い偉業であらねばならなかった。そしてこのような女性の意識変化は特に大正期の都市〈新中間層〉に顕著にみられる。

四　〈育児もの〉の受容者

〈新中間層〉とは小林嘉宏によれば、「新中間階級」「新中産階級」「新中等階級」、あるいは「プチブル・インテリ階級」ともよばれ、「手工業者、小工業者、小売商人、自作農」など「旧」来からの「中下層ブルジョア階級」と区別された階級である。そしてこの階級は、大正九（一九二〇）年には「一四・六八％」という「数量的にも無視できない存在にありつつあった」という。[13]

この階層の家族の特徴は、核家族で、夫婦ともに教育レヴェルが高く、夫はサラリーマンとして家庭外で働き、妻は家庭内を司るという性別分担であること。加えて子どもの教育に熱心であることがあげられる。小林のことばを借りれば、「知識および知的能力の優位性」が自らの「レゾン・デートル」なのである。だが単なる知的能力では足りない。この子どもの教育は、近代の学校教育システムに順応することが重視されている。なぜなら〈新中間層〉は、元来社会的地位を学歴によって得た階級であり、家業をもたない彼らの地位を継承・再生産する手段は学歴だからだ。

そして家業継承という目的もないため、父親は家庭内での教育において権限をもつ必要がない。養育や教育の主導権は、俸給労働者として家の外で働く父親ではなく、必然的に家内の母親が掌握することになる。国家の要請した「良妻賢母」を主眼とした女性の教育は、〈新中間層〉ならではの事情で受け入れやすく働いたのだ。

彌生子が臼杵で最初の女学生になった前年の一八九九年に、高等女学校令が公布された。これを受けて、当時官立・公立・私立を合わせて三十七校だった高等女学校は、一九一二年には実科女学校を合わせて二百九十九校になった。一九一七年寺内内閣直属の臨時教育会議[14]ののちはさらに増え、一九一九年には四百六十二校、一九二六年には八百六十二校になった[15]。彌生子が〈育児もの〉を発表し始めた一九一〇年代は、急激に中等・高等教育を受けた女性が増加してゆくただ中であった[16]。

彌生子が〈育児もの〉で描く母親たちは、この〈新中間層〉の価値観と多くの点で一致する。前節に述べた育児の神聖視がその一つだが、ほかにも前世代までの産育習俗から離れた「「エリット」造り」の育児を、核家族として目指したことも指摘できる。

山本敏子は〈新中間層〉の理想を「一家團欒」にあるとして、「奉公人の排除」、「年齢順」、「妻が中心」あるいは「夫は不在」という三つの特徴を指摘[17]している。彼女らは地縁や血縁、あるいは「女中」とよばれる子守など多様な人手によって支えられたかつての育児とは別の道を選ばなければならなかった。

先述した「婦代の讃美」や「御返事」で、「新らたな家」の「空気を呑み込ませよ」という「子守りの徹底教育[18]」を奨励していたのが納得できるであろう。彌生子の〈育児もの〉は、この点でも〈新中間層〉の母親たちと親和性のある作品だった。

では地縁も血縁も奉公人も排除したうえに「夫が不在」の家庭において、母親たちは何を支えに育児をしただろう。実はその一つが育児書であったと考えられる。育児の啓蒙家三田谷啓に注目した首藤美香子は、大正九（一九二〇）年代を「それ以前に提起されていたものとは異なる育児規範が成立」した時期と説明する。そして「それが育児書の出版増大」などによって普及し、「「我が子」の教育に主体的に取り組み、理想の子どもを育成することで女性としての自己実現をはかろうとする母親を中心に受容されつつあった」と論ずる。そのなかでも、特に三田谷が当時の育児書の代表的書き手で

あったとし、その主張が産育習俗と絶縁した「科学的」な育児の推奨、「産育主体」としての母親の教化、ひいては「科学に希望を託し」た「強健な国民形成」などであったことを論じた。加えて三田谷が「啓蒙対象」として注目したのが、関西の「郊外生活者」であったと指摘している[19]。

このようにみてゆくと、彌生子の〈育児もの〉は、〈新中間層〉と育児観を共有していたことが分かる。実際、〈新中間層〉の育児を論ずる場合に彌生子はしばしば引き合いに出される[20]。たとえば『読売新聞　よみうり婦人附録』「今日の婦人」欄でも、彌生子の生活は「子供と一緒に遊び乍ら」「英語の方を」などの見出しで紹介されている。「女流作家中で深い学識と上品で巧みな筆致とを以て世に知られて居る野上彌生子（三一）様を静かな巣鴨の御宅にお訪ねいたします」としたうえで、「午前中は英語の方を良人（臼川氏）に学んで居る」「良人が大変親切にして呉れますし二人の可愛い子供達が何時も友達になつて呉れます」という彌生子のことばをひき、「御家庭は何時もスキートな空気に充ちて居ります[21]」と結んでいる。

〈育児もの〉に描かれた「良人と私とで初めて形作つた新らたな家」での「空気」（「御返事」）は、メディアにおいて「スキートな空気」として、〈新中間層〉を凝縮したようなイメージで彩られている。〈育児もの〉の読者には、これが家父長的「家風」から解放された育児として、「家庭内における自律性[22]」ある女性の新しい生き方にみえたかもしれない。しかし、現代からみれば、これは女性を「強健な国民形成」の担い手とするだけでなく、女性を家庭と育児に囲い込む新たな抑圧になってゆく危うさを含んだものだった。女性の生き方の固定化と彌生子の〈育児もの〉とが接していることは留意すべきである。

五　〈新中間層〉読者との隔たり

しかし彌生子の〈育児もの〉を受容した〈新中間層〉の母親たちと、それを書いた彌生子自身とは明らかな隔たりがある。

ひとつは、一九〇九年から一九一九年に発表された〈育児もの〉は、〈新中間層〉が「数量的にも無視できない存在にありつつあった」一九二〇年代より十年ほど先行している点である。「新しき命」など〈育児もの〉を、彌生子が日記の中で「これはとにかくユニークなものであるから、存在価値があるとおもふ」（大正十四年一月十三日）と自負を抱いて記したのもこの先行性のゆえであろう。

そしてさらに重要なことは、〈育児もの〉の「曾代子」や「お槇」は、彌生子のある一面でしかないということだ。新しい育児規範で「理想の子どもを育成」することに邁進したとしても、彌生子は育児に「自己実現を図ろうとする母親」にはならなかった。「毎日少くとも六七時間の書物を読んだり、考へたり、書いたりする時間」（「婦代の讃美」）が必要な「大事な仕事を書斎の中に持つてゐる」（「御返事」）「文学者」あるいは「知識人」だと自己認識していたのではないだろうか。〈育児もの〉が「生活記録」に過ぎないことは間違いないとしても、この「記録」は彌生子の生活の一面でしかない。

一九二〇年代には、彌生子は〈育児もの〉から次のステップへ移行する。すなわち子どものための作品、母親のための作品へと進んでいる。そのステップの基盤はすでに〈育児もの〉と並行してつくられていた。〈育児もの〉のかたわら、多くの翻訳をし、少女小説、戯曲、詩を書き、『さしゑ』、『伝説の時代　神々と英雄の物語』、『愛子叢書　人形の望』、『父親と三人の娘』などの単行本も出版にこぎつけていたのである。

このうち「墓地を通る　第二」を収録した『さしゑ』（光華堂、一九一一）は高浜虚子が編者であり、『伝説の時代』（尚

文堂、一九一三）は「夏目金之助」の序文があり、『父親と三人の娘』（東京堂、一九一五）は鈴木三重吉編の『現代名作集』の一つであった。夫を介していたとはいえ、漱石に関わる人間関係や、漱石の遺した出版文化の恩恵はここに至っても及んでいた。〈育児もの〉を受容した読者には、彌生子のこうした別の側面は見えなかったかもしれない。

また彌生子が〈育児もの〉を書いていた時期は、ちょうど『青鞜』が発刊されていた時期に重なる。「ねえ、赤さま」も『青鞜』に発表し、伊藤野枝を〈育児もの〉に登場させている。だが「家庭内での自律性」を重んじて育児に「女性としての自己実現を図ろうとする」〈新中間層〉の母親の理想と、『青鞜』の運動とは相容れないものである。もちろん『青鞜』という雑誌にとっても、彌生子の〈育児もの〉は到底なじむ内容ではなかった。

しかし彌生子は一方で〈新中間層〉に〈育児もの〉を提供しつつ、『青鞜』に関わり続けていた。よく知られるように、一九一一年九月に『青踏』が創刊されたとき、「社員」の欄に「野上八重子」の名が見えるが、彌生子は翌月「一時退社」となっている。だが、『青鞜』創刊から一年経った大正元年九月に『京之助の居睡』（『青鞜』第二巻九号）を掲載してから、終刊まで二十八回刊行された『青鞜』に、実に二十回作品を掲載している。この掲載回数は同時期の他の社員に比べても決して少なくない。特に後半は「ソニア・コヴァレフスカヤ」[23]の翻訳を掲載し続けた。[24]藪が指摘するように、彌生子がこのころ「翻訳に軸足を移しつつあった」[25]という事情もあろうが、「自分の最大な絶対的な義務は自分の天才を啓発することだと常に考え」ているというソーニャと、「女流の天才を生まむ事を目的」（『青鞜』創刊号「青鞜社概則」[26]）とする青鞜社とを結び付けていたのだろう。[27]

彌生子はソーニャの女性としての懊悩に思いを馳せ、のちに次のように述べている。

フランス科学院で、ポアンカレーから最高の名誉賞を与えられてさえ、彼女のほんとうの願いは、ただひとりの女として愛されたかったのであった。仕事か、愛か。社会か、家庭か。男とともに働くことがあたり前になっている今日にお

いてさえ断ちきれない問題に、ソーニャは先駆者として、またそれ故に運命的に悩まなければならなかった[28]。

ただしソーニャは「大学教授」であった。ソーニャは彼女自身がいわば男性社会、学歴社会のなかの女性だった。それは「男とともに働くことがあたり前」ではない〈新中間層〉の母親から遠い。

要するに彌生子は〈新中間層〉へ〈育児もの〉を提供しながら、もう一方で彼女なりに『青鞜』と歩を合わせていたと言える。森田草平は先に引用した「女ながらも明哲身を保つの術」について、「自分の作を載せる場所載せる時と云ふやうなものに関しても、私どもの到底考へ及ばないやうな、細心な注意を払つてゐられる」（傍点は原文に拠る）ことも指摘している。これはある意味で的確な批評であろう。

しかしながら、「ソニア・コヴァレフスカヤ」の翻訳のもとになった英訳本は、夫である「野上から与えられたもの[29]」であったという。夫の意思の延長線上での翻訳でもあり、野上工房の作品ともいえる[30]。漱石の人脈の多くは学歴社会の住人であり、法政大学に勤める豊一郎も例外ではない。彌生子もその価値観から逃れてはいないのだ。彌生子が『青鞜』から学んだものはあったはずだが、根本的な背離はこの点にあった。

もう少し踏み込んでいい直せば、彌生子にとっての『青鞜』は、同調するところは多分にありながらも、学ぶべき新思潮の一つに過ぎなかったのだ。その態度は明治女学校で学びつつも、キリスト教には染まらず西洋思想として享受するに留まっていた態度と同様だ。それはのちにふれる〈大正期教養主義〉の文化享受の在り方に似通っている。

彌生子が『青鞜』の次に関わるのが、一九一八（大正七）年創刊の『赤い鳥』である。漱石の弟子鈴木三重吉主宰のこの雑誌の発刊時に、高浜虚子、小宮豊隆、芥川龍之介、森田草平、そして夫野上豊一郎に続いて彌生子も賛同者として名を連ねている。このメンバーから、改めてこの雑誌が「漱石門下生」の雑誌、いわば漱石山脈の一部であったことが分かる。

〈育児もの〉の作者だった彌生子は、次に『赤い鳥』で、子どものための作品の書き手ともなり、創作童話や「セルマ・ラゲーレフ」などの翻訳童話を発表した。『赤い鳥』は有名な「標榜語（モットー）」[31]にあるように、「世俗的な下卑た子供の読みものを排除して、子供の純性を保全開発する」という一種の理想主義を掲げていた。それを享受したのは都市〈新中間層〉の子どもであった[32]。彌生子も息子の素一に『赤い鳥』は「無条件で」読むことを許可した[33]という。『赤い鳥』が学校の教師を通して子どもの作文投稿の場でもあったという一面は、学校制度での子どもの順応を期待する〈新中間層〉の読み物としていかにも相応しいものであった。

先述したように、『赤い鳥』がその出発において賛同者を多く「漱石山脈」から得たことは、この雑誌が「漱石山脈」に関わるいわゆる〈大正期教養主義〉と絡み合っていたことをも物語る。竹内洋は一九七〇年ごろまでの「教養主義」を見渡した一連の論考で、それを「人文学の読書を中心にした人格の完成を目指す態度」と定義する[34]。そして「西洋文化の崇拝を核にしたからバタ臭くはあったが、修養主義と同じく勤勉を底礎にした鍛錬主義」、「学校的教養」とし、「文化エージェント」[35]として岩波書店をあげ、『赤い鳥』との同質性も指摘する。すでに助川が彌生子を「教養精神の権化」と指摘[36]したとおり、これらの特徴はすべて彌生子に当てはまる。

臼杵から上京し、読書を通して勉学に励み、英語を学び続け、ギリシア神話、ローマ神話を翻訳する態度。明治女学校のキリスト教や「女学」思想、『青鞜』の女性運動にふれながらものめり込むことなく学ぶのみの態度。岩波書店から出版をする自らを「書斎主義」[37]と名づけ、伝統文化としての能を学び、晩年は田辺から哲学を学び、生涯にわたり勉強し続け書き続けた態度。これはまさに竹内のいう「教養主義」である。そして戦後、唐木順三の「自己優越感」[38]という指摘も彌生子に当てはまるであろう。

だがしかし、竹内が〈大正期教養主義〉の起源とする「旧制高校」には、女性である彌生子はむろん該当しない。

六　〈大正期教養主義〉を受容する〈新中間層〉

彌生子の〈育児もの〉は〈新中間層〉に受容されはしたものの、彌生子自身が〈新中間層〉の母親ではなかった。彌生子はその価値観を、『赤い鳥』ひいては〈大正期教養主義〉と共有していたのである。彌生子が日記に「束縛」「鎖」[39]（大正十三年三月二十九日）などと否定的に書きつけた夫豊一郎を内面化し、より「漱石山脈」的ですらあったのかもしれない。

〈新中間層〉を視座に据えれば、彼らの志向は〈大正期教養主義〉を入れる態勢が充分だったといえる。〈大正期教養主義〉について論じられるとき、多くは発信者も受容者も旧制高校出身者という男性を想定している。だが、実は発信者の権化として女性の彌生子があり、その受容者として〈新中間層〉の母親がいた。息子を旧制高校へと進学させ、学歴における成功者に育てることで生活を向上させていこうと考える〈新中間層〉の母親たちは、アカデミズムの一角を制する「漱石文化」に寄りそっているのだ。

しかし女性である限り、旧制高校文化を内包する〈大正期教養主義〉との完全なる一致がみられたのではない。彌生子は「漱石山脈」に受け入れられつつ排除され、周縁者と位置づけられていた。

だがそれゆえに彌生子の〈育児もの〉は〈新中間層〉に受け入れられたのである。いわば〈育児もの〉は〈大正期教養主義〉の変則的読み物、女性ジェンダー版といえる。

〈育児もの〉が〈新中間層〉の価値観と親和性をもっていたのは、彌生子の子ども三人が偶然にも男児であり、いずれもが帝国大学出身者になったことが功を奏したのかもしれない。だが先述したとおり、彌生子は「理想の子どもの育成に自己実現を託す母親」ではなく、あくまで書き手であった。〈育児もの〉から、『赤い鳥』を発表媒体として子どものための作品を書き、のちには母親のための提言もし、「入学試験お伴の記」（『東京朝日新聞』一九二七年九月二十九日～十月十四

日）なども発表する。そして法政大学女子高等学校の名誉校長として教育現場と関わってゆく。彌生子の〈育児もの〉は、いわば〈新中間層〉と〈大正期教養主義〉のいずれからもずれながら、両者のはざまに位置づけられる。

野上彌生子の〈育児もの〉作品リスト（標題は特に注がなければ初出に拠る）

「母上様」（『ホトトギス』13―8、一九一〇・四）
「墓地を通る　第二」（『ホトトギス』14―6、一九一一・二）
「お守の記」（『国民新聞』一九一一・六・一九）
「楽しみ多き郊外生活「染井附近」」（『婦人画報』58、一九一一・七）
『さしゑ』（光華堂、一九一一・七）「墓地を通る　第二」収録
「秋の一日」（『ホトトギス』15―4、一九一二・一）
「或日の朝食前」（『ホトトギス』15―8、一九一二・五）
「小動物」（『婦人画報』72、一九一二・八）
「毀れた玩具の馬」（『婦人画報』80、一九一三・三）
「指輪」（『中央公論』28―13、一九一三・一一）
「手紙」（『婦人画報』92、一九一四・二）
「婦代の讃美」（『婦人画報』93、一九一四・三）
「御返事」（『婦人画報』94、一九一四・四）
「新らしき命」（『青鞜』4―4、一九一四・四）
「UN PETIT」（『読売新聞』一九一四・四・四）
「ねえ、赤さま」（『青鞜』4―5、一九一四・五）

「染井より（一）」（『婦人画報』96、一九一四・六）注（4）参照
「五つになる児」（『中央公論』29―7、一九一四・七）
「染井より（二）」（『婦人画報』99、一九一四・八）注（4）参照
「父の死」（『三田文学』6―2、一九一五・二）
「私信」（『青鞜』5―8、一九一五・九）
「二頭の小馬」（『中央公論』30―11、一九一五・一〇）
「或る日のこと」（『大阪朝日新聞』一九一六・一・一～二）
「二人の小さいヴァガボンド」（『読売新聞』一九一六・一・一～三・一七）
「渦」（『太陽』22―11、一九一六・九）
〈「今日の婦人」（『読売新聞』一九一六・一〇・四）インタヴュー記事〉
『新しき命』（岩波書店、一九一六・一一）
「小猫」（『大阪毎日新聞』一九一七・一・一～二）
「彼女」（『中央公論』32―2、一九一七・二）
「娘の読むべき書物」（『婦人公論』2―7、一九一七・七）
「霊魂の赤ん坊」（『中央公論』33―1、一九一八・一）
「母親の通信」（『大阪毎日新聞（夕刊）』、一九一九・六・八～二九）

注

（1）〈育児もの〉に該当する作品とその初出情報は末尾リストを参照されたい。なお、野上彌生子の作品は特に注がない限り、『野上彌生子全集』（岩波書店、第Ⅰ期一九八〇～一九八二、第二期一九八六～一九九一）に拠る。

（2）Wedekind, Frank "*Frühlings Erwachen*"（一八九一）。野上豊一郎が一九一四年に翻訳を出版している。フランク・ヴェデキント作、野上臼川訳『春の目ざめ　少年悲劇』（東亜堂書房、一九一四）。実物未見。

（3）明治三十九年十一月［十七］日付（書簡番号713『漱石全集　第二十二巻』岩波書店、一九九六）個人蔵　大分県先哲史料館寄託。
（4）「染井より」は同題で『婦人画報』大正三年六月第九十六号と同誌八月の九十九号があるため、全集「後記」に倣い（一）とした。
（5）Henry David Thoreau『森の生活』“Walden; or, Life in the Woods”一八五四年。ソローについては「或日の朝食前」（『ホトトギス』一九一二年五月）でも言及。
（6）渡邊澄子『日本の作家１００人　野上彌生子　人と文学』（勉誠出版、二〇〇七）。
（7）「御返事」は全集では「小説」に分類されている。
（8）岩橋邦枝『評伝　野上彌生子　迷路を抜けて森へ』（新潮社、二〇一一）。
（9）森田草平「野上彌生子論　その印象二つ三つ」（『女性改造』一九二四・一〇）。
（10）「海神丸」（『中央公論』一九二二・九、のち、『ヴエストポケツト傑作叢書』春陽堂、一九二二、『海神丸　其他』改造社、一九二四）。「キリストと祖父と母」（『中央公論』一九二四・一）。
（11）助川徳是『野上彌生子と大正期教養派』（桜楓社、一九八四）。
（12）小山静子『子どもたちの近代　学校教育と家庭教育』（吉川弘文館、二〇〇二）。
（13）小林嘉宏「大正期「新中間階級」の家庭生活における「子供の教育」」（『日本家族史論集　十　教育と扶養』吉川弘文館、二〇〇三）。ただし「一四・六八％」という数量の把握には調査に問題があるかもしれないことを示唆している。
（14）海後宗臣編『臨時教育会議の研究』（東京大学出版会、一九六〇）参照。また、この件については、池田俊一氏（オーストラリア国立大学）の示唆に拠る。
（15）秋枝蕭子「「良妻賢母主義教育」の逸脱と回収――大正・昭和前期を中心に」（鶴見和子ほか監修、河野信子ほか編『女と男の時空　日本女性史再考　5　闘ぎ合う女と男　近代』藤原書店、一九九五）参照。
（16）奥武則は、高等女学校への進学者が増加したとはいえ、その割合は「大正期になっても同年齢集団のわずか五パーセントだった」（「「国民国家」の中の女性――明治期を中心に」（鶴見和子ほか監修、河野信子ほか編『女と男の時空　日本女性史再考　5

闘ぎ合う女と男　近代』藤原書店、一九九五）と指摘している。

(17) 山本敏子「日本における〈近代家族〉の誕生――明治期ジャーナリズムにおける「一家團欒」像の形成を手掛かりに」（小山静子編『論集現代日本の教育史4　子ども・家族と教育』日本図書センター、二〇一三）。

(18) 渡邊澄子前出。

(19) 首藤美香子『近代育児観への転換　啓蒙家三田谷啓と一九二〇年代』（勁草書房、二〇〇四）。

(20) 沢山美果子『近代家族と子育て』（吉川弘文館、二〇一三）など。

(21) 『読売新聞　よみうり婦人附録』（一九一六年一〇月四日）、記者不明。

(22) 小山静子前出。

(23) ソーニャ・コヴァレフスカヤとは、一八五〇年のモスクワに生まれた数学者。ドイツで数学を学び博士号を取得し、三十三歳でストックホルム大学の講師となり、三十八歳でパリ科学アカデミーよりボルダン賞を授与され、翌年スウェーデン科学アカデミーからも賞を受けた。ソーニャは数学者としての才能ばかりでなく、文学的才能にも恵まれ、優れた文学作品も残したといわれている。ワロンツォーワ著、三橋重男訳『コワレフスカヤの生涯　孤独な愛に生きる女流数学者』（東京図書出版、一九七五）、リン・M・オーセン著、吉村証子・牛島道子訳『数学史のなかの女性たち』（法政大学出版局、一九八七）、宮田親平『科学者の女性史　コワレフスカヤからマクリントックまで』（創知社、一九八五）など参照。

(24) 『青鞜』終刊後は、『トルストイ研究』（大正七年九月）に続きが一部掲載され、岩波書店の単行本化（一九一三年一一月）でようやく完訳となった。

(25) 藪禎子『女性作家評伝シリーズ3　野上彌生子』（新典社、二〇〇九）。

(26) 『復刻版　青鞜第一巻』（不二出版、一九八三）。

(27) この件に関しては拙論「野上彌生子の『青鞜』時代――ソーニャ・コヴァレフスカヤとの出会い」（愛知淑徳大学国語国文　第二十五号、二〇〇二・三）を参照されたい。

(28) 『ソーニャ・コヴァレフスカヤ（自伝と追想）』「序」（岩波文庫改版、一九七八・六）。

(29) 『ソーニャ・コヴァレフスカヤ（自伝と追想）』「序」前出。

(30) 野上臼川は彌生子より一年早く「ソニア、コワレフスキイの家出」(『ホトトギス』一九一二年十一月)を発表している。
(31) 『赤い鳥』複刻版(日本近代文学館、一九七九)。
(32) 河原和枝『子ども観の近代『赤い鳥』と「童心」の理想』(中公新書、一九九八)。
(33) 野上素一「日本の母の記録1 母の横顔 野上弥生子の生活と思想」(『婦人之友』一九六二・一)。
(34) 竹内洋『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』(中公新書、二〇〇三)。
(35) 戸坂潤「現代における「漱石文化」」(『戸坂潤全集第五巻』勁草書房、一九六七)を、竹内洋が引用。
(36) 助川徳是前掲書。
(37) 瀬沼茂樹『野上彌生子の世界』(岩波書店、一九八四)。
(38) 唐木順三『新版 現代史への試み』(筑摩書房、一九六三)。久野収の「反俗エリート意識」(『戦後日本の思想』岩波書店、一九九五)という批判もある。
(39) 稲垣信子が『「野上彌生子日記」を読む(上)』(明治書院、二〇〇三)ですでに日記の該当部分について論じている。

付記 本稿は二〇一四年十一月十二日シドニー工科大学で行われたシドニー日本語教育国際大会(SYDNEY-ICJLE2014)での口頭発表「大正期新中間層の家庭教育——野上彌生子を視座として」の一部であることをお断りいたします。発表時、貴重なご意見を下さった方々にお礼申し上げます。
写真撮影に関しては、大分県先哲史料館にて村上博秋氏(大分県立歴史博物館)にお世話になりました。この場をかりてお礼申し上げます。

(本学非常勤講師)